

万葉の川心

萬葉集に於て作れる歌

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

(巻第七 一一九二番歌)

しろたえ
白栲しろたえに にはふ信土まつつちの 山川かみに
わが馬なづむ 家恋ふらしも

レシートを握りしめ、スーパーの新春福引きに並んだ。どうせ当たらないと思いつつも、わくわくしてくるから面白い。特等の旅行券はまだ出ていない。もし当たったら・・・そこからお決まりの幻想開始。そういえば、もう長いこと旅をしていないことに気づく。「家族旅行」ではなく「旅」。知らない街をゆつくりと巡り、美味しいものをいただく。歴史にふれるもよし、神社仏閣をお参りするもよし。家で待つ人を思いながら土産物を選ぶのもまた楽しい。「お母さん、次だね。」の声に、はっと我に返る。いよいよ今年の運試しが近づく。

恋は思い募うことであるが、「共にいないものを求める情」という意味もある。万葉の昔、無論旅に出れば長い間帰らない。電話もなければ手紙もままならない。命の保障もない。その分、相手を思う心、案じる心は強かったのではないだろうか。念が旅を進める馬に移る。恋情が強いから馬がつかずくのだと信じられていた。旅立ちの朝、羽織のひもを妻が結んで無事を祈る。夫は山を見るに川を見るに、馬のつまずきにつけ、遠くの妻を慕う。馬が野で草をムシャムシャ食べていると、妻や子はそのように口を動かして、私のことを話しているに違いないと思う。馬が荒々しく鳴くと、馬に怒られたとて家が恋しいのだと歌に詠む。「白い色に映える真土、信土の山川に私の馬は



行きなずんでいる。家人が恋うているらしい。」共に暮らしていなくても、家族は想いでつながっている。そのことは平成の今も決して変わらない。

真土峠は奈良県五條市と和歌山県橋本市の県境で、万葉集でもよく詠われている。真土山そのものは海拔百メートルほどだが、川は落合川とされ、そこには深い溪谷があり、紀ノ川(吉野川)に流れる。「神代の渡し」とも「飛び越え石」とも呼ばれる大きな渡り石があり、万葉の時代からその石を使って多くの人が川を渡ってきた。古道は高野山と都の行き来にも使われ、この地域には弘法大師の伝説も数多く残っている。写真の碑は、奈良県橋本市JR南海電鉄橋本駅前にある。

「特等、大当たりです。」ガランガランという大きな鐘の音が店中に響き渡った。すごいと叫んだ。周りのお客さんまで拍手している。生まれて初めて特等が出るのを目の当たりにした。「やったあ。」喜んでるのは、一人だけ。買った物にきていた少年だった。そう、前の人。しかし、なぜか気分が良かった。特等は必ずあることも分かったし、純朴な少年が目を輝かせていたことも見ていて嬉しかった。良い旅を・・・と心で声をかけた。我々親子は予定どおり末等のティッシュ。エコ袋に入れながら「こんな早くに運を使い果たしてはならない。これで良いのだ。」とつぶやいた。見下ろすと、娘の視線が冷めたかった。今年も一年、前向きでいこうと思う。